# 南門の構造形式と屋根形式の検討

## －第一次大極殿院の復原研究10－

### 1　はじめに

平城宮第一次大極殿院南門SB7801（以下、南門と称す）は、奈良時代前半の平城宮大極殿院の南面中央に開く門である。大極殿院の諸施設が完備したⅠ－２期の復原検討を進めるなかで、南門はⅠ－１期の創建からⅠ－４期まで存続しているため、創建当初の形態を検討する。

南門はこれまで単層切妻造や二重入母屋造に復原されてきた（復原の推移は『紀要2011』参照）。このように形式が異なる背景には、遺構の遺存状況が深く関わっている。

主な発掘調査は1973年（第77次調査）、2005年（第389次調査）におこなわれ、基壇外装抜取溝から、基壇規模は桁行95尺×梁行55尺と判明した。その他の遺構には、南北面階段の痕跡、基壇東北隅部の雨落溝（Ⅰ－４期）がある。また、南門の東西には築地回廊が接続する。

南門は、基壇規模や、基壇と階段幅の関係に着目した検討の結果、重層門の傾向をもち、平面は桁行５間×梁行２間の可能性が高いことがわかった。いっぽうで、上部構造は柱配置をはじめとして不明な点が多い（二重門の場合の下層柱配置案については『紀要2012』参照）。その上、現存する古代の重層門は法隆寺中門（８世紀初頭、桁行４間×梁行３間、二重、入母屋造）に限られる。

重層門には二重門と楼門の２つ構造形式があるが、各形式の初現や規模、設置位置から、南門の形式を検討する。

### 2　古代の重層門の構造形式

主に文献や絵画資料（以下、史料等とする）を用いて、古代の重層門の創建当初の構造形式、規模、設置位置、遮蔽施設を確認する。それを踏まえ、南門の構造形式について、二重門と楼門のうち、どちらの蓋然性が高いかを検討する。史料等の記述内容は表７にまとめた。

**薬師寺南大門（表７-①）**　『薬師寺縁起』（長和４年：1015成立）には「仏門五間、二重、戸三間、壁二間、（中略）、是云南大門」と記され、南大門は桁行５間の二重門と考えられる。天平元年（729）の創建であるが、天延元年（973）の焼失後、長和２年（1013）に再建されている。『薬師寺縁起』の成立時期を考慮すると、これは再建後の南大門を記した可能性がある。しかし、発掘調査（1981年）で出土した隅木蓋瓦から、創建期の南大門はやはり二重と考えられる（中門は単層切妻造）。なお、南大門は薬師寺の正門であり、伽藍の中心軸上に位置する。

**興福寺南大門（表７-②）**　『興福寺流記』（平安～鎌倉時代成立）には「南大門一宇、五間」と記され、南大門は桁行５間の門と考えられる。南大門は、『興福寺流記』に引用される「天平記」が成立した８世紀前半までに完成したと考えられている。発掘調査（2009年、平城第458次調査）で検出した創建期の南大門は、この記述と同規模であり、その後の７度の火災焼失後も規模を変えずに再建され続けたことが判明している。また、享保焼失（1717年）以前の実測図である『興福寺建築諸図』もこれらとほぼ同規模に描かれており、規模や二重門の形式が江戸時代まで踏襲された可能性は高く、二重門に描く『春日社寺曼荼羅』（14世紀）の描写も信用性が高い。なお、南大門は興福寺の正門であり、伽藍の中心軸上に位置する。

**東大寺中門（表７-③）**　『七大寺巡礼私記』（12世紀前半成立）には、大仏殿および大仏殿南庭の後に「南中門一宇、二蓋、五間」と記され、南中門とは大仏殿院の中門を指し、桁行５間の二重門と考えられる。中門は、天平勝宝年間（752年と757年の２説あり）の創建後、治承４年（1180）の焼失までは倒壊や再建の記録がない。いっぽう、南大門は10世紀後半に台風により倒壊し、12世紀後半に再建された。史料の成立時期からも、南中門は大仏殿院の中門と考えるのが妥当であろう。なお、近世以前の諸資料および発掘調査（1959～1960年）より、創建期の大仏殿院回廊は複廊であったことが判明している。また、創建中門も現存中門と同様に、伽藍の中心軸上に位置する。

**西大寺中大門（表７-④）**　「西大寺資財流記帳」（宝亀年間：770～781成立）の金堂院の項に「中大門一基、二重、長九丈、廣三丈七尺」と記され、中大門は金堂院の中央正面に位置する桁行５間規模の門と考えられる。西大寺伽藍は、「西大寺資財流記帳」の成立と同時に整っていたと考えられる。また、「西大寺資財流記帳」は重層建物に「基」、単層建物に「宇」の単位を用いていることが知られ、中大門はさらに「二重」と記されるため、創建期は二重門であった可能性が高い。

**平安宮朱雀門（表７-⑤）**　平安宮の正門である朱雀門は『伴

表７　史料等にみる古代の重層門の形式

| 門形式 | 時代 | 名称 | 上段：史料等名、成立年代<br>下段：記述内容 | 桁行×梁行 | 上段：屋根形式<br>下段：その根拠・年代 | 門位置<br>○：中軸<br>×：他 | 遮蔽装置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 二重門 | 奈良時代前半 | ①薬師寺南大門 | 『薬師寺縁起（護国寺本）』長和4年（1015）<br>「仏門五間、二重、戸三間、壁二間、長五丈、広三丈二尺、是云南大門」 | 50尺×32尺<br>発掘遺構：<br>86尺×32尺 | 入母屋造/寄棟造<br>奈良時代の隅木蓋瓦(南大門の東北部で出土、昭和56年) | ○ | 築地塀 |
| | | ②興福寺南大門 | 『興福寺流記』平安～鎌倉時代<br>「南大門一宇、五間、中三間有戸、間別一丈五尺、広二丈八尺、天平記、延暦記并同之、宝字記云、長七丈八尺、広三尺」（『天平記』は８世紀前半成立、『宝字記』の「広三尺」は梁行としては狭すぎるため「広三丈」の誤りか) | 78尺×28(30)尺<br>発掘遺構：<br>78尺×30尺 | 入母屋造<br>『春日社寺曼荼羅』鎌倉時代<br>『興福寺建築諸図』江戸時代 | ○ | 築地塀 |
| | 奈良時代 | ③東大寺中門 | 『七大寺巡礼私記』12世紀前半<br>「南中門一宇、二蓋、五間、瓦葺、東西長六丈一尺、南北広二丈四尺」 | 61尺×24尺 | 不明 | ○ | 複廊 |
| | 奈良時代後半 | ④西大寺中大門 | 『西大寺資財流記帳』宝亀11（780）<br>「中大門一基、二重、長九丈、廣三丈七尺、在鐸八口」 | 90尺×37尺 | 不明 | ○ | 築地塀か |
| | 平安時代 | ⑤平安宮朱雀門 | 『伴大納言絵詞』12世紀後半 | ７間×２間 | 入母屋造<br>『伴大納言絵詞』12世紀後半 | ○ | 築地塀か |
| 楼門 | 奈良時代後半 | ⑥西大寺東西楼門 | 『西大寺資財流記帳』宝亀11（780）<br>「東西楼門二基、各長二丈六尺、廣二丈」 | 26尺×20尺 | 不明 | × | 築地塀か |
| | 平安時代後半 | ⑦平安宮会昌門 | 『伴大納言絵詞』12世紀後半 | ５間×２間 | 入母屋造<br>『伴大納言絵詞』12世紀後半 | ○ | 複廊 |

大納言絵詞』（12世紀後半成立）に、桁行７間×梁行２間、二重、入母屋造に描かれ、両脇に築地塀が取り付く。朱雀門の創建は、大同元年（806）の「皇城南面諸門」（『扶桑略記抄』）に朱雀門が含まれる場合、これより遡る可能性がある。永祚元年（989）８月「顛倒」（『日本紀略』）の後、保元３年（1158）12月「修造」（『二条院御即位記』・『保元三年番記録』）の記録があるが、損壊や修理の程度はあきらかでない。そのため、『伴大納言絵詞』の成立時期に創建期の朱雀門が存在した否か判断し難い。

**西大寺東西楼門（表７-⑥）**「西大寺資財流記帳」の金堂院の項に「東西楼門二基、各長二丈六尺、廣二丈」と記される。東西楼門は、建物の単位に「基」すなわち重層を示唆し、さらに「二重」でなく「楼門」と記されることから、創建期は桁行３間規模の楼門であったと推察される。また、東西にそれぞれ配置されたことを考慮すると、伽藍の中心軸上に位置したとは考えにくい。

**平安宮会昌門（表７-⑦）**　八省院の正面中央に位置する会昌門は『伴大納言絵詞』（12世紀後半成立）に、桁行５間×梁行２間、楼門、入母屋造に描かれ、両脇に複廊が取り付く。天喜６年（1058）２月「焼亡」（『康平記』）の後、承保２年（1075）正月以前の造営（『本朝世紀』）の記録がある。このため、『伴大納言絵詞』の成立時期に存在した会昌門は、創建期のものでない可能性がある。

**重層門の構造形式の検討**　史料等にみる古代の重層門のうち、桁行５間の二重門は、興福寺南大門を積極的に評価すると奈良時代前半まで遡る。また、南門と同じく複廊が取り付く事例（東大寺中門）も確認できる。さらに、二重門の事例はすべて伽藍や宮殿の中心軸上に位置する。これらは南門の形態を復原する上で、積極的な根拠となり得る。

いっぽう、史料等にみる楼門の初現は奈良時代後半の西大寺東西楼門であり、これは桁行３間規模と小さく、中心軸上に位置しない。さらに、桁行５間の楼門は平安時代の平安宮会昌門まで確認できない。なお、この平安宮会昌門は複廊が取り付き、中心軸上に位置する宮殿の門の事例である。

## ３　古代の重層門の屋根形式

現存する古代の重層門は、法隆寺中門に限られる。このため、重層門の屋根形式を知るには、平安時代以降の絵画史料や前近代の現存遺構に頼らざるを得ない。

平安時代～室町時代成立の絵巻物において、屋根形式が判断できる二重門40件中、入母屋造は38件、寄棟造は１件、切妻造は１件であった。同様に楼門43件中、入母屋造は42件、切妻造は１件であった。

報告書等で確認できる前近代の現存建築においては、二重門23件中、入母屋造22件、寄棟造１件（広徳寺山門、茅葺、享保５年：1720）であった。同様に楼門（１間門を除く）56件中、入母屋造50件、寄棟造５件、切妻造１件であった。

このように日本の重層門には、平安時代から近世まで一貫して入母屋造が好んで用いられたことがわかる。南門は寄棟造である可能性も否定はできないが、現存する二重・寄棟造の広徳寺山門が茅葺であることからも、南門を積極的に寄棟造と考えることは難しい。

## ４　南門の構造形式と屋根形式

南門は桁行５間と規模が大きく、奈良時代前半の平城宮にとって、大極殿院の中心軸上に位置する重要な建物である。したがって、時代性や規模、設置位置を鑑みると、南門は二重門の可能性が高いと考える。また、二重門に複廊が取り付く現存事例はないが、創建期の東大寺中門がそうであり、奈良時代前半にも同様の事例は存在したと推察される。

重層門の屋根形式は、近世まで入母屋造が好んで用いられたことから、南門は入母屋造と考える。**（中島咲紀）**